

謎の鐙摺城

～ 誰が・何処で付けたか名の由来 ～



高田順一郎丸

あぶずり 鐙摺の名は

今回は長者ヶ崎から鐙摺へ舞台を移しました。何故かと申しますと歴史があるからです。「鐙摺」は鎌倉時代の裏舞台で、ミステリーな処だからです。

「鐙摺」という地名は源頼朝が、付けた名として伝説的に伝えられています。本当は（許可・賛同）したというのが正しいようです。よく聞く話ですが「馬にまたがり鐙を摺りながら頂上まで登った」から「鐙摺」に

なりました。そんな訳で筆者も「葉山郷土史・創刊号の鐙摺編」を持って調べに行きました。さて、地名の由来ですが、「吾妻鏡」（1180年）や「源平盛衰記」（1161年）に鐙摺の名が出てきます。そこには「源頼朝が鎌倉幕府設立に際し、貢献した三浦一族の出城や館があった」と記されているのです。



「鐙摺」の呼び名は、この時に現れ、今では「あぶずり」と呼ばれています。しかし、過去には幾つかの呼び名がありました。幾つかあげますと「あぶずり・あぶづる・あぶずる・あぶずり・あぶする・あぶみずり」の呼び名があり、時代の洗礼の激しさを感じさせます。（1685）年の

「鎌倉誌（志）」には一旦「アブスリ」と統一されたようですが、その後、昭和初期になると、幾通りかの名がまた復活してしまします。地名を解する書「難解地名辞典」には、「難解地名辞典」には、滅多にでてこない地名として紹介されています。

「あぶずりのアブ」は「崩れやすい壁」とあり、ズリ・ツルは無く、ツルとあり「連」と同意とあります。「川に沿う細長い土地・砂州」を意味するとのこと。これはこの

「あぶずり」の呼び名は、この時に現れ、今では「あぶずり」と呼ばれています。しかし、過去には幾つかの呼び名がありました。幾つかあげますと「あぶずり・あぶづる・あぶずる・あぶずり・あぶする・あぶみずり」の呼び名があり、時代の洗礼の激しさを感じさせます。（1685）年の

「鎌倉誌（志）」には一旦「アブスリ」と統一されたようですが、その後、昭和初期になると、幾通りかの名がまた復活してしまします。地名を解する書「難解地名辞典」には、「難解地名辞典」には、滅多にでてこない地名として紹介されています。

「あぶずりのアブ」は「崩れやすい壁」とあり、ズリ・ツルは無く、ツルとあり「連」と同意とあります。「川に沿う細長い土地・砂州」を意味するとのこと。これはこの

「あぶずり」の呼び名は、この時に現れ、今では「あぶずり」と呼ばれています。しかし、過去には幾つかの呼び名がありました。幾つかあげますと「あぶずり・あぶづる・あぶずる・あぶずり・あぶする・あぶみずり」の呼び名があり、時代の洗礼の激しさを感じさせます。（1685）年の

「あぶずり」の呼び名は、この時に現れ、今では「あぶずり」と呼ばれています。しかし、過去には幾つかの呼び名がありました。幾つかあげますと「あぶずり・あぶづる・あぶずる・あぶずり・あぶする・あぶみずり」の呼び名があり、時代の洗礼の激しさを感じさせます。（1685）年の

「あぶずり」の呼び名は、この時に現れ、今では「あぶずり」と呼ばれています。しかし、過去には幾つかの呼び名がありました。幾つかあげますと「あぶずり・あぶづる・あぶずる・あぶずり・あぶする・あぶみずり」の呼び名があり、時代の洗礼の激しさを感じさせます。（1685）年の

「あぶずり」の呼び名は、この時に現れ、今では「あぶずり」と呼ばれています。しかし、過去には幾つかの呼び名がありました。幾つかあげますと「あぶずり・あぶづる・あぶずる・あぶずり・あぶする・あぶみずり」の呼び名があり、時代の洗礼の激しさを感じさせます。（1685）年の

会話の閃き

あります。『三浦三郎為清・大田原三郎義久・真田与一義忠が源頼朝を迎えた時、千尋の絶壁（田越川河口・なぎさ珈琲から古川電工保養所を超えて小浜まで）と隘路の、切り通し近くで、頼朝が「ここは何処か」と聞きます。為清は「鎌倉から三浦の方へ鶴が鳴き乍ら飛びましたので



鳴鶴ヶ崎といった」とあります。その後、一行は山峡（切り通し）の義久の館（現・柳屋旅館隣り）で休憩をとり、義久は頼朝に見て欲しかった物があり、眼前の小山を指さします。「あれは、父、義明からこの場所に出城を築け」と言われた事を話します。これは後に山の名として「鐙摺城?・丸山・旗立山・軍見山」という名がつかます。

現地では丸山とも呼んでいるようですが、この名は元からある名のようなです。「旗立山」（1180）年頃、三浦郡と畠山軍が小競り合いをした際に、勝者が「小山」に旗を立てたと言われます。軍見山は（1512）年頃の戦国初期に北条早雲に敗れた三浦一族が使った名であるらしい。筆者は早速、日陰茶屋の駐車場横にある急階段から登って見たところ確

かに、素晴らしい眺めです。高さ23メートルの山です。此処は城であり、見張り台に適していると痛感！ですが、しかし、城としては余りにも小さ過ぎる。精々、たて坪、三十畳の広さの平屋の別荘かオシャレた居酒屋であれば十分な広さで、城があったとするには無理がありすぎると思いました。



前述したように、この山へ、義久は頼朝一行を案内し「馬にまたがり鏡を摺りながら頂上まで登った」とあります。この貧相な山のどこが城なのかと…？

「それはいい思ひ付き」と言つて、「鏡摺と鏡摺城」の名はその場で決まってしまった…？

そして、義久は「頼朝に、この一帯の名である大磯は、相模川右岸（平塚）にも同じ名があるの

話が閃めきを産んだ訳ですが、この名はそのまま現在へと伝えられました。筆者はこの鏡摺周辺の

で、地名を変えては」と尋ねる。与一が脇から「我ら一同が馬で、鏡を摺り小山を登りましたの

お店に飛び込み、聞き込みを試みました。飛び込んだ先は運良く、鎌倉時代（800年前）から続く家系の子孫（s・y氏）

と提案をしますと、頼朝はでてこないのです。

この一帯を地図やネット上で調べても、不思議にも鏡摺山とか鏡摺城の名

「郷土史・鏡摺編」にも、各研究者の言葉には『「鏡摺」「鏡摺山」「鏡摺城」それは何処か？』研究者も特定するの

筆者もかなり困惑しながらも、この「浅間山」と「鏡摺山」は日陰茶屋の裏方にある山々だとすると考えが違ってきます

てきた結果とも言えるのではないのでしょうか？話を戻しますが、頼朝という人物は用心深く丘陵の谷を馬で登ったり、降りたりする性格（義経とは違う）ではないよう

（現）柳屋旅館の隣に（本家）鈴木家があり、その鈴木家に代々伝わる義久の館跡の板や柱等が残っていると聞かれますが、この義久の館に（1182）年頃から、

谷」「根岸谷」の名も。そして「城柵跡」は今でも現存する城跡の名残です。これはどういう訳で

は、堀内の東にある「仙元山」（標高108メートル）をモチーフにし、何らかの影響があつて入れ替わった節があるので

「旗立山・軍見山」ではなく「浅間山・鏡摺山」ではないかと？

（中央大学寮のある方面）が該当する場所ではないかと直感しました。

立山周辺）は手「要塞だ」と呼んでもおかしくはありません。

「鏡を摺り登った山」は「浅間山」鏡摺山だと考えますが……落着いて、この辺で名の由来から鏡摺のドラマへと切り替えます。

「浅間山」はあまり何処かとは分らないようです。「鏡摺山は旗立山を言い、鏡摺城も旗立山？」と地元の方もはつきりとは…

広範囲な「谷戸」集落を総称して、鏡摺と呼んだ。元々有名でもない「鏡摺」が時代の変遷の中で新旧入り乱れ、小名と俗称を繰返し使われ

頼朝が伊豆流罪中の、身の前」という女性を逗子小坪に呼び寄せた事がばれて仕舞います。この事が物騒げな事件へと発展

はでてこないのです。

次回「亀の前」を取

材します。

次回「亀の前」を取

